

演題4

食支援に関わる多団体が合同で行った研修会を経て ～嚥下評価実習後のアンケートから今後の研修会の内容を検討する～

¹⁾ 名古屋市立西部医療センターリハビリテーション科, ²⁾ 旭労災病院リハビリテーション科,
³⁾ JA愛知厚生連豊田厚生病院総合内科, ⁴⁾ たけうちファミリークリニック

○立花広明¹⁾, 山本美和²⁾, 渡口賢隆³⁾, 武内有城⁴⁾

【はじめに】研修会の中で、嚥下評価の部門を担当し、実習を軸に行った。

その研修会を行った団体は、愛知・岐阜・三重県で活動する食支援に関わる7団体から成り、地域の食支援の向上を目的とし結集したものである。具体的には、平成28年12月3日に第2回東海摂食栄養フォーラムと銘打って開催した。研修内容は嚥下評価、食事介助、マウスケアと嚥下調整食の調理実習及び、講演会とシンポジウムから成る。その際、自身が担当した嚥下評価の参加者に対し、フォローアップアンケート調査を行ったので報告する。

【目的】参加者に対してフォローアップアンケート調査を行い、各現場において実習内容を活かしているかどうか、または要望を知ることにより、今後の研修内容の改善に繋げる。

【方法】研修会の4か月後に、実習対象46名に対して郵送(33名)または、メール(13名)にてアンケート調査を実施した。アンケート内容は、7項目を設定し、嚥下実習で実際に行った、嚥下のスクリーニング評価、食事形態の選定、嚥下障害の方の問題点を中心に「できる」「できない」のチェックリストと自由記載形式で行った。

【結果】実習対象46名に対して、有効回答数は26件だった。

回答者の職種は、栄養士18件、歯科衛生士5件、看護師1件、言語聴覚士1件、医師1件だった。

1「実習前に嚥下障害に関わっていた」76%、2「現在も嚥下障害者に関わっている」69%、3「嚥下のスクリーニング評価ができる」59%、4「食事形態を選

択できる」50%、5「嚥下障害の方の問題点の把握ができる」45%、6「嚥下障害に関わる上で特に難しいと感じている項目」嚥下評価40%、食事介助17%、口腔ケア3%、栄養管理31%、その他9%だった。また、7「更に聞きたいと思った内容」については、摂食嚥下障害のレベルに応じたリクライニング位(姿勢)や留意点など、食事動作改善のためのアプローチ方法、ポジショニングについて等が多く挙げられた。

【考察および結論】回答者は栄養士が多かったが、参加者自体も栄養士が多く、募集の段階で栄養士会に呼びかけるなどの影響が大きかったと考える。

嚥下のスクリーニングテストの実践や問題点の把握に関しては、「できる」が約半数に留まっており、これについては参加者の職種に依存している部分が多く、「嚥下評価の方法は学べたが、実践数が少なく自信を持ってやれない」などの回答が多かった。それを反映するように、特に難しいと感じている項目で「嚥下評価」が40%と4項目中1番だった。

また、更に聞きたいと思った内容では、食事動作改善のアプローチやポジショニングについてといった、動作や姿勢に関するものが多く挙げられた。

そのため、実習内容としては、嚥下の各論のみでなく、嚥下の仕組みからポジショニングを含めた総合的なものが求められていることが推察され、1参加者がひと通り学べるような応用コース作りが、今後の研修に導入すべきものと考えられた。

また、参加職種に関しては、実際に食事介助や摂食状況を観察しているのは介護職であるため、介護職が参加する団体への積極的な呼びかけが必要と考える。